



Title	巻頭言：被災地での支援活動における医療者の役割
Author(s)	永井, 利三郎
Citation	大阪大学看護学雑誌. 2013, 19(1)
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56717
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

—卷頭言—

被災地での支援活動における医療者の役割
Roles of medical personals in the support activities at the disaster area

平成 23 年 3 月 11 日に東日本を襲った大地震とそれに続く大津波は、我が国に甚大な被害をもたらした。被害者の総数は昨年の 12 月現在で、死者 15813 人、行方不明者 2497 人と把握されている。このような甚大な被害の中で医療者は何ができるのだろうか。

平成 7 年 1 月に発生した阪神淡路大震災では、自身が被災地の住民であったが、幸い個人的な被害はほとんどなかったため、当時勤務していた阪大小児科の中で議論し、神戸市とも相談して小児救護診療所を神戸市中央市役所の中に設置し、3 月末まで活動した。阪神淡路大震災は死者 6400 余名、負傷者 4 万人余であったが、復興までの短期的支援はそれなりに機能したと考えている。

周知のように今回の震災は特に津波被害の死者が多かったため、阪神大震災とは全く状況が異なっていた。私は小児神経学会の中で被災地支援委員会を立ち上げ、震災直後から現地の小児神経科医と連絡を取っていたが、専門医療であることもあり、直接支援の要請はなく、支援活動は控えることとなっていた。その後縁あって気仙沼市の養護教諭や保健師の方々とつながり、その年の 12 月から学会としての支援活動が始まった。主に気仙沼市の学校や地域で把握している様々な障害のある子どもたちについて、その支援者であるご家族や学校の先生方を側面から支援するのが目的である。

毎月交代で小児神経学会の会員が現地に赴き、ご家族や地域の教員、養護教諭、保健師、医師などの相談に対応する活動を行っている。私自身も 4 回行かせていただいた。気仙沼市は気仙沼湾の奥に位置する港町であるがゆえに津波の被害も大きく、約 2 千人の方々が亡くなっている。初めは昨年（平成 24 年）の 1 月に伺ったが、港にはほとんど船が無くさみしい雰囲気であった。その後行く度に船の数が増え、11 月に伺った際には多数のカツオ漁船やサンマ漁船が停泊しており、明らかに活気が出てきているのを感じることができた。

気仙沼市にある県立の支援学校は高台にあるために直接の津波被害はまぬかれた。震災時は生徒たちがまさにバスで帰宅しようとしていた時であったため、急きょ学校に戻り個人的な被害はなかった。しかしご家族が迎えに来ることができず、約 1 週間は教員のみで生徒たち全員の生活を支えたとのことであった。また地域にいた障害児は避難所に入ることができず、その多くが壊れた自宅や車の中で過ごしていたため、避難所以上にその実態が把握できず、また支援物資も届きにくかったようである。この時に機能したのは、普段からの医療者と障害児家族とのつながりであった。

月日が経過してもうすぐ満 2 年を迎える。相談活動の中で得られる情報では、頑張ってきた障害児たちが、住み慣れない場所にある仮設住宅での生活に疲弊してきており、不適応が目立ってきていること。また先生方をはじめ、支援者自身が被災者であり、疲れが出てきていることなど、様々な課題が見られている。大事なことは我々がつながりを大切にして、時間をかけて見守る活動を続けていくことであると考えている。このような思いやりと見守りは医療の原点として改めて問い直すべきものであり、医療者の大きな研究課題も横たわっていると考えている。

大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
統合保健看護科学分野 生命育成看護科学講座
永井利三郎